

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02430

研究課題名（和文）冷戦期日本文学の変容と国際性をめぐる総合的研究-GHQ検閲・指導から助成・招聘へ

研究課題名（英文）Comprehensive research on transformation and internationalization of Japanese literature during the Cold War period

研究代表者

志賀 賢子（川崎賢子）（SHIGA(KAWASAKI), Kenko）

立教大学・文学部・特任教授

研究者番号：40628046

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近現代日本文学研究の一環として、戦後占領期から文化冷戦期（高度経済成長期）にかけての文学の変容と国際化について総合的に研究するものである。アジア太平洋戦争期における内務省検閲、GHQ占領期における検閲とメディア政策は、占領終了後、冷戦期の国際情勢を脱みつつ変容し、再編され、民間の広報外交、ソフトパワーの手に委ねられた。とくにロックフェラー財団が日本の作家を米国に招聘したことはよく知られている。本研究ではこの留学プログラムにより、有吉佐和子が見出したポストコロニアルの諸問題、ジェンダーの課題について研究するとともに、留学前後の大岡昇平における占領表象について研究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、これまでの学術研究において断絶の相が強調されていた1940年代から1960年代の日本文学研究に、「戦時期」概念を導入して、日中戦争・太平洋戦争・GHQ占領期・冷戦期を連続的な変容の諸相のもとに研究対象として捉え直したものである。この時期の表現とメディア政策との相関及び葛藤の関係性についてはプロパガンダ、インテリジェンス（情報戦）、検閲に着眼しつつ分析と考察を重ねた。日本文学研究における学際的研究及び国際的研究の可能性を追求し、隣接分野の研究への波及効果を持ったという意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：As part of the study of modern and contemporary Japanese literature, this research is a comprehensive study of the transformation and internationalization of literature in trans-war regime. After the end of the GHQ occupation, media policy was internationally transformed in relation to the international situation during the Cold War, and left in the hands of private public relations diplomacy and soft power in the United States. In particular, it is well known that the Rockefeller Foundation invited Japanese artists to the United States. Conservative polemicists such as Eto Jun and Fukuda Tsuneari, novelists classified as the "daisan no shinjin", such as Kojima Nobuo, Yasuoka Shotaro, and Shono Junzo; Ooka Shohei, best known for his portrayals of the war and the POW experience in "Nobi," "POW Records," and "Leyte Senki," among others; and women writers such as Ariyoshi Sawako and Ishii Momoko, who studied in the United States at the invitation of the Rockefeller Foundation.

研究分野：日本近代文学・文化

キーワード：GHQ 文化冷戦 日本文学・文化 文学の国際化 検閲 ソフトパワー ジェンダー 映画

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 研究対象領域に関しては、GHQ 占領期におけるメディア政策と表現との相関、葛藤の関係についての研究蓄積が進む一方で、これが冷戦期におけるソフトパワーと表現との関係へとどのように再編され、継承されたかについての研究がほとんどなかった。
- (2) とくに、メディア政策(プロパガンダ、検閲)と表現との関係については、抑圧/闘争/解放という図式に落とし込まれがちであった。
- (3) 1950年代日本文学における国民文学論争などの文学と政治の課題について、(日本文学)一国文学史観の中だけで論じられるか、あるいは、日本対米国という二国間関係の中だけで論じられるという弊害に陥りがちであった。
- (4) 文化冷戦期における、米国による民間助成の拠点であったロックフェラー財団による日本人作家招聘プログラムについての研究は、政治学、国際関係論、比較文学などの領域において進みつつあり、あるいは、個別の作家研究において招聘による米国留学体験が論じられることはあったが、近代日本文学の研究対象として総合的に捉えられることがなかった。とくにこの留学体験が問題視される作家は、江藤淳などの保守派論客及びいわゆる「第三の新人」グループの小島信夫、安岡章太郎などが主たるものであった。彼らの国際性については、日米間の二国間関係の中に収斂する議論にとどまりがちであった。

2. 研究の目的

- (1) 研究対象とする文化冷戦期を GHQ 占領の終焉により米国による日本文学・日本文化へのはたらきかけが、CIE などの統治機関からロックフェラー財団などの民間組織へと再編された時期としてとらえなおし、ソフトパワーと文芸表現との関係について明らかにしていく。
- (2) 奨励、招聘のはたらきかけと、抑圧、葛藤、自粛、自己検閲、(再)発見などの変容との関係について、戦後 GHQ 占領期との連続的な変容の側面と再編の側面について明らかにしていく。
- (3) 日本対米国という二国間関係にとどまらない日本文学の文化冷戦期における国際化の諸相を洗い出し、分析する。
- (4) とくにロックフェラー財団による日本人作家プログラムによって米国留学した作家たち(福田恆存、江藤淳、大岡昇平、安岡章太郎、小島信夫、阿川弘之、庄野潤三、石井桃子、有吉佐和子ら)を事例として、文化冷戦期における日本文学者の国際化と変容を包括的に分析する。

3. 研究の方法

- (1) 国内では国会図書館・憲政資料室、外交史料館、郷土資料館、新聞博物館書庫等の資料調査、国外ではメリーランド大学プランゲ文庫、米国公文書館における資料調査、あわせてデータベース、遠隔複写等を利用してのロックフェラー財団アーカイブ調査などにより、GHQ 占領期から文化冷戦期にかけての、メディア政策の変容及びソフトパワーへの再編移行期の文芸表現資料を収集し分析した。
- (2) 資料の収集と分析にあたり、プロパガンダ、検閲、インテリジェンス(情報戦)の視点を導入し、文化冷戦期における日本文学と政治について新たな考察を行った。
- (3) 文化冷戦期における日本文学の国際化について、たとえば江藤淳が『成熟と喪失』において論じた日米間の国際関係と家族(性・身体・私的)空間との相関性という言説を相対化する視点について考察する。たとえば、日本人作家留学プログラムによってたとえば有吉佐和子が米国留学を通じて(再)発見したポスト・コロナルの視点、ジェンダーの視点と対照させるなどの試みを積み重ねた。
- (4) 文化冷戦期における日本文学・日本文化の国際化について、日米間の二国間関係に還元されることのない事象として、東アジア諸地域における日本文学・日本文化の変容と移動の観点から、中国建国前後の表現者の移動とネットワークの再編の研究を、隣接する研究分野(大衆文化、映画等)の研究者と共同して組織した。また、外地からの引き揚げ、シベリア抑留と引き揚げに関係する文学研究者との共同のフィールドワーク及び情報交換にも努めた。
- (5) 文化冷戦期の日本文学における、戦争体験及び GHQ 占領体験の喚び起こし、語り直しという視点から、ロックフェラー財団による日本人作家プログラムによって米国に留学した大岡昇平テキストを再読、分析する。
- (6) 文化冷戦期の日本文学における変容と国際化について、エリート文学者であるこの時期の留学体験者における戦争体験及び GHQ 占領体験の喚び起こしと語り直しを、松本清張などの大衆文学者におけるそれと比較し、分析した。

4. 研究成果

(1) 概観

国内では、検閲・プロパガンダ・インテリジェンスをキーワードに運営される学際的かつ国際的な共同研究会である 20 世紀メディア研究所の編集委員として、研究例会、国際シンポジウムにおける報告をはじめ運営及び司会、機関誌編集などに携わった。論文執

筆、単著の上梓、批評エッセイ・書評等の社会的発信にもつとめた。国内における昭和文学会、日本近代文学会における学会発表に加え、オーストラリアにおける ASAA (Asian Studies Association of Australia)、JSAA (Japan Studies Association of Australia) などの国際学会において英語圏での学会発表発信を行なった。隣接する文化研究分野、芸術研究分野、映画研究分野の研究者と協力し、国際シンポジウム「戦後中日芸術交渉：継承と展開」、於 北京、清華大学、中国における研究発表を行なった。

(2) 研究の主たる成果は下記の通り

単著単行本、共著共編著単行本、国際学会発表、国内学会発表、競争的外部資金の獲得等をあげることができる。

単著

『もう一人の彼女 李香蘭/山口淑子/シャーリー・ヤマグチ』岩波書店、全 249 頁、2019 年

書籍所収論文

「の領分」、川崎賢子、『江戸川乱歩新世紀 越境する探偵小説』所収、105-122 頁、ひつじ書房、2019 年

国際学会発表 Ecstasy and humour: Representations of ageing in Ariyoshi Sawako's texts KAWASAKI Kenko, 2019 JSAA (Japan Studies Association of Australia)、於モナシュ大学 2019 年 7 月

同 The Significance of Overseas Experiences to Ariyoshi Sawako's Literature, KAWASAKI Kenko, 2018 ASAA (Asian Studies Association of Australia)、於シドニー大学、2018 年 7 月

国内学会発表「武蔵野夫人」 空間と場所そして移動する境界 昭和文学会、国学院大学、2019 年 6 月 15 日

競争的外部資金の獲得等

第 21 回松本清張研究助成「松本清張における GHQ 占領に関する表象と言説の総合研究」2019 年度

(3) 得られた成果の国内外におけるインパクト

とくに単著『もう一人の彼女 李香蘭/山口淑子/シャーリー・ヤマグチ』においては日本文学研究者および文化人の旧満洲国、上海租界における言動が、どのように戦後 GHQ 占領期、冷戦期へと転じていくのか、文学界と映画界との相互交渉などを明らかにした。本書は、日本近代文学会、日本映像学会、立教大学日本文学会などの学会誌における書評のほか、朝日新聞、日本経済新聞などの一般紙のほか週刊誌などでも書評が掲載された。この内容については北京清華大学における国際研究集会においても発表の機会を得た。近代日本文学研究及び映画研究、メディア研究の領域において学際的、国際的な反応と評価を得ることができた。日中戦争、太平洋戦争、GHQ 占領期、冷戦期における、日本文学日本文化(映画・演劇)研究に、プロパガンダ研究、インテリジェンス(情報戦)研究、検閲研究の視点を入れたこと、米国公文書館、メリーランド大学プランゲ文庫等の一次資料を活用したことなどが評価された点である。

国際学会における報告発表について、論文化を慫慂され、英文原稿を脱稿したところである。

(4) 今後の展望

貫戦期(日中戦争期、太平洋戦争期、GHQ 占領期、冷戦期)を通じての、メディア政策と表現との相関・葛藤・抵抗の諸相を、国際関係の力学を睨みつつ重層的に分析するという研究を継続したい。特に冷戦期におけるソフトパワーと表現の関係として、ロックフェラー財団から招聘された日本人作家の言説と表象の分析を深める。

従来、ロックフェラー財団による日本人作家招聘プロジェクトの対象となった文学者に関しては、批評家では江藤淳について彼の GHQ 占領期における検閲についての「発見」と戦後の言論空間に対する批判と保守派論客としての言説の分析などの研究が先行していた。また江藤の批評との関係から、米国に招聘された第三の新人グループ-小島信夫、安岡章太郎、庄野潤三らについて、国際関係や共同体と家族・性・身体の表象の相関やねじれなどが問題にされてきた。しかしながら、有吉佐和子、石井桃子ら女性の留学者が見出したジェンダーの問題、老、子ども文化の問題、ポストコロナルな人種差別の問題などについて、ロックフェラー財団のプロジェクトとの関連から考察した研究はほとんどない。あるいは、それらの問題意識によって、江藤淳や第三の新人グループの言説を照射し、相対化することも手つかずのままである。

また、冷戦期における日本文学の国際化が問題化される場合には、これまで、どうしても日米二国間の関係に還元されて論じられがちであった。あるいはとりわけ江藤淳らの言説の中に、日本文学日本文化の国際的な位置を考察する場合に、その国際性のモデルを日米二国間関係へと収斂させてしまう偏差があったというべきかもしれない。今後、冷戦期における日本文学の国際化を検証する場合には、その過程で周縁化された領域の表現や言説を洗い直すことも必要となるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 122
2. 論文標題 震災後の関心の変化 (立教大学・名古屋大学合同研究会 教員セッション 近現代 文学・文化研究の「いま」と「これから」)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教日本文学	6. 最初と最後の頁 93-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 79
2. 論文標題 「書評 五味淵典嗣著『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 152-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 18
2. 論文標題 映画「上海の女」小論 表象の転移と再編	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Intelligence	6. 最初と最後の頁 8-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 12
2. 論文標題 博多人形がつなぐ夢野久作と江戸川乱歩	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 センター通信	6. 最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 19
2. 論文標題 『『 ヤミ市 文化論』書評 眩しい都市』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大衆文化	6. 最初と最後の頁 93-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石川巧・落合教幸・金子明雄・川崎賢子・浜田雄介・小松史生子	4. 巻 19
2. 論文標題 「日本近代文学会春季大会(二〇一八年五月二六日 於:早稲田大学) パネル発表「江戸川乱歩所蔵資料の活用による探偵小説研究」の発表報告」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 大衆文化	6. 最初と最後の頁 97-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 818号
2. 論文標題 「私の鷲」とロシアン・コネクション	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 821号
2. 論文標題 田村泰次郎と彼女	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 823号
2. 論文標題 上海租界の文化人とインテリジェンス	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 21-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 825号
2. 論文標題 香港映画の「李香蘭」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 図書	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 川崎賢子	4. 巻 別冊
2. 論文標題 文学としての化粧 宇野千代と兎の足	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文藝別冊	6. 最初と最後の頁 105-111
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 「武蔵野夫人」空間と場所そして移動する境界
3. 学会等名 昭和文学会、国学院大学
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 KAWASAKI Kenko
2. 発表標題 Ecstasy and humour: Representations of ageing in Ariyoshi Sawako's texts
3. 学会等名 JSAA(Japan Studies Association of Australia)、於モナ シュ大学 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 李香蘭再考
3. 学会等名 国際シンポジウム「戦後中日芸術交渉:継承と展開」北京清華大学 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 江戸川乱歩における脱異性愛的欲望のゆらぎと変容を探る
3. 学会等名 日本近代文学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川崎賢子 (KAWASAKI Kenko)
2. 発表標題 The Significance of Overseas Experiences to Ariyoshi Sawako's Literature
3. 学会等名 ASAA(Asian Studies Association of Australia)シドニー大学
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 KAWASAKI Kenko
2. 発表標題 Girls Debate: in Aoi Sanmyaku
3. 学会等名 the Japanese Studies Association of Australia(JSAA)ウーロンゴン大学(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川崎賢子
2. 発表標題 李香蘭をめぐるインテリジェンス人脈
3. 学会等名 諜報研究会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 西原和海、川崎賢子、沢田安史、谷口基共編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 485
3. 書名 定本夢野久作全集第4巻	

1. 著者名 西原和海、川崎賢子、沢田安史、谷口基共編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 489
3. 書名 定本夢野久作全集第5巻	

1. 著者名 石川巧、落合教幸、金子明雄、川崎賢子共編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 360
3. 書名 江戸川乱歩 新世紀 越境する探偵小説	

1. 著者名 川崎賢子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 251
3. 書名 もう一人の彼女 李香蘭/山口淑子/シャーリー・ヤマグチ	

1. 著者名 谷口基、西原和海、川崎賢子、沢田安史	4. 発行年 2017年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 466
3. 書名 定本夢野久作全集第2巻	

1. 著者名 沢田安史、谷口基、西原和海、川崎賢子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 国書刊行会	5. 総ページ数 569
3. 書名 定本夢野久作全集第3巻	

〔産業財産権〕

〔その他〕

20世紀メディア研究所
<http://www.waseda.jp/prj-m20th/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----